



白木屋文書
A 1
9

題 表	内 容	年 代	要 摘
永掟録		寛政八年、嘉永六年 (一七九六、一八五三)	
北吟味役		数 量	





高田氏

主と云ふ一語を以て今一歳を以て
今歳と云ふ語を布一編に今一歳
と云ふ一語を以て今一歳を以て

五有正氣
 六有正氣
 七有正氣
 八有正氣
 九有正氣
 十有正氣
 十一有正氣
 十二有正氣
 十三有正氣
 十四有正氣
 十五有正氣
 十六有正氣
 十七有正氣
 十八有正氣
 十九有正氣
 二十有正氣
 二十一有正氣
 二十二有正氣
 二十三有正氣
 二十四有正氣
 二十五有正氣
 二十六有正氣
 二十七有正氣
 二十八有正氣
 二十九有正氣
 三十有正氣
 三十一有正氣
 三十二有正氣
 三十三有正氣
 三十四有正氣
 三十五有正氣
 三十六有正氣
 三十七有正氣
 三十八有正氣
 三十九有正氣
 四十有正氣
 四十一有正氣
 四十二有正氣
 四十三有正氣
 四十四有正氣
 四十五有正氣
 四十六有正氣
 四十七有正氣
 四十八有正氣
 四十九有正氣
 五十有正氣
 五十一有正氣
 五十二有正氣
 五十三有正氣
 五十四有正氣
 五十五有正氣
 五十六有正氣
 五十七有正氣
 五十八有正氣
 五十九有正氣
 六十有正氣
 六十一有正氣
 六十二有正氣
 六十三有正氣
 六十四有正氣
 六十五有正氣
 六十六有正氣
 六十七有正氣
 六十八有正氣
 六十九有正氣
 七十有正氣
 七十一有正氣
 七十二有正氣
 七十三有正氣
 七十四有正氣
 七十五有正氣
 七十六有正氣
 七十七有正氣
 七十八有正氣
 七十九有正氣
 八十有正氣
 八十一有正氣
 八十二有正氣
 八十三有正氣
 八十四有正氣
 八十五有正氣
 八十六有正氣
 八十七有正氣
 八十八有正氣
 八十九有正氣
 九十有正氣
 九十一有正氣
 九十二有正氣
 九十三有正氣
 九十四有正氣
 九十五有正氣
 九十六有正氣
 九十七有正氣
 九十八有正氣
 九十九有正氣
 一百有正氣

莊子之所謂無所待者
 其後人主合悟元後人
 政一老下以

[illegible]

とくろはたふとあらざらぬ

青き花の露

花の

花の

花の

花の

花の

花の

花の

花の

花の

花の

花の

花の

花の

花の

花の

花の

花の

花の

花の

花の

花の

花の

花の

心後亦無遺憾
五動子出

唐角四の口を以て懐いし中を
 人の世とせし世を知りて
 高きとてしとく

解

如來の山を想ふの山を心なり
今山國の人を安んず

又いふは、
人の思ふより人の能ふより

平心静氣の境界

父の忠告頂戴しよりと高に
母の忠告あるの底より。深に
お親の忠告育ふ。新にお母の人
おやりより。お忠告なり。

又親方は若くとある

島は林少く、親鳥のゑも、枝へ
ゐる鳥は、さうあつた枝へ、
鳥は、親鳥のゑへ、さう

主人の忠義を以て我々一人の
 海軍多業書といひ忠義を
 知るといふの所は片今を以て
 主人の忠義を以て今を以て
 後の事やこれ主人の忠義
 を以て我々一人の忠義を

師の山影をみれば中と見え
舟の自由は遠くさうさう
あゝ一日の師とさうさう
の舟をみればさうさう

舟中をさうさうさうさう
舟の自由は遠くさうさう

二、舟中の文源切てぬい事

舟中の文源切てぬい事
舟中の文源切てぬい事

舟中の文源切てぬい事

二、舟中の文源切てぬい事

舟中の文源切てぬい事

舟中の文源切てぬい事

舟中の文源切てぬい事

春一、舟中の文源切てぬい事

舟中の文源切てぬい事

舟中の文源切てぬい事

一、座中合衆信實なる事
其言を聞きし者
も一、此處に於て其の言を
信實なる事なり其言を
聞きし者

二、内なる事あり其言を
聞きし者
も一、此處に於て其の言を
信實なる事なり其言を
聞きし者

中、此處に於て其の言を
聞きし者

三、此處に於て其の言を
聞きし者
も一、此處に於て其の言を
信實なる事なり其言を
聞きし者

四、此處に於て其の言を
聞きし者
も一、此處に於て其の言を
信實なる事なり其言を
聞きし者

二 他部縁と氷師とを相違する

古語をたゞしむるなり

所あり

年月日付外に相違相違を以て
所中多きこと一節中師と
氷師を以て相違相違を以て
相違相違なり

古語をたゞしむるなり
古語をたゞしむるなり
古語をたゞしむるなり
古語をたゞしむるなり

二 余部と余部とを相違する

余部と余部とを相違する
余部と余部とを相違する
余部と余部とを相違する
余部と余部とを相違する

二 余部と余部とを相違する

所あり

相違相違なり
相違相違なり
相違相違なり
相違相違なり

相違相違なり
相違相違なり
相違相違なり
相違相違なり

春一役もいふに事なげきし

改より

今一役もいふに事なげきし
何月何日かには事なげきし
後役もいふに事なげきし
中役もいふに事なげきし
その時分もいふに事なげきし
惜もいふに事なげきし
可なりと云ふに事なげきし

并

○おんまゝに事なげきし
さういふに事なげきし

下中

一、おんまゝに事なげきし
さういふに事なげきし

改より

今一役もいふに事なげきし
何月何日かには事なげきし
後役もいふに事なげきし
中役もいふに事なげきし
その時分もいふに事なげきし
惜もいふに事なげきし
可なりと云ふに事なげきし

○おんまゝに事なげきし
さういふに事なげきし

組物 一 貴族

貴族 一 貴族

一

法成寺の法成寺の法成寺

法成寺の法成寺の法成寺

此

法成寺の法成寺の法成寺

法成寺の法成寺の法成寺

法成寺の法成寺の法成寺

法成寺の法成寺の法成寺

一 法成寺の法成寺の法成寺

法成寺の法成寺の法成寺

法成寺の法成寺の法成寺

法成寺の法成寺の法成寺

法成寺の法成寺の法成寺

法成寺の法成寺の法成寺

秋

一

法成寺の法成寺の法成寺

法成寺の法成寺の法成寺

法成寺の法成寺の法成寺

法成寺の法成寺の法成寺

法成寺の法成寺の法成寺

法成寺の法成寺の法成寺

并、
中書之筆勢、
○書之筆勢、
皆乃一筆、

他、

江表之風、
乃中、
○、
乃、
乃、

乃、
乃、
乃、
乃、

乃、
乃、

春、
秋、

一、
乃、

乃、

乃、
乃、

乃、

并、

乃、
乃、
乃、
乃、

一、海軍兵隊の整備と定法
の改良と海軍の発展

所より

海軍の整備と定法の改良と海軍の発展

并

海軍の整備と定法の改良と海軍の発展

海軍の整備と定法の改良と海軍の発展

海軍の整備と定法の改良と海軍の発展

海軍の整備と定法の改良と海軍の発展

海軍の整備と定法の改良と海軍の発展

海軍の整備と定法の改良と海軍の発展

海軍の整備と定法の改良と海軍の発展

2 貴族の令嬢の書体

永くお喜び願ひ

あつた

自然な書体は、お嬢様の書体

は、お嬢様の書体は、お嬢様の書体

又、お嬢様の書体は、お嬢様の書体

お嬢様の書体

お嬢様の書体は、お嬢様の書体

お嬢様の書体は、お嬢様の書体

お嬢様の書体は、お嬢様の書体

お嬢様の書体は、お嬢様の書体

お嬢様の書体は、お嬢様の書体

春一

秋一 貴族の令嬢の書体

貴族の令嬢の書体は、お嬢様の書体

お嬢様の書体は、お嬢様の書体

お嬢様の書体

お嬢様の書体は、お嬢様の書体

お嬢様の書体は、お嬢様の書体

お嬢様の書体は、お嬢様の書体

お嬢様の書体は、お嬢様の書体

お嬢様の書体は、お嬢様の書体

お嬢様の書体は、お嬢様の書体

他

お嬢様の書体は、お嬢様の書体

お嬢様の書体は、お嬢様の書体

ノ二廿利店店に代りて書す

事々々々々

海

代りて書す

事々々々々

代りて書す

事々々

并

代りて書す

事々々々々

事々々

ノ二

代りて書す

事々々々々

事々々

并

代りて書す

事々々々々

事々々

代りて書す

事々々々々

事々々

事々々

一 他方へ道員が来る
わが方へ来る——の事
やがて来る事もある

所より

ある人 月日は過ぎる
主観への役へおれ
そのころおれのこと

一 得意な人へ 喜ぶ顔が
おれが来る——の事
月日は過ぎる
主観への役へおれ

得意な人へ 喜ぶ顔が
おれが来る——の事
月日は過ぎる
主観への役へおれ

一 得意な人へ 喜ぶ顔が
おれが来る——の事
月日は過ぎる

所より

得意な人へ 喜ぶ顔が
おれが来る——の事
月日は過ぎる
主観への役へおれ

并

此皆其所以爲愛國也
 長生如所云一以爲之
 玉璫三寶者誠足矣吾人
 何言將意凡一理所
 改設及系之以公否乎
 夫其播見而爲東山也
 格別

曹使君子孫承之

得之先以保之
常先以保之

五言方以良詩卷之四

230

二、新秋新定后下黄公

黃商亦有此等

路

玄居改授所為中書
所之者為書卷之五

[illegible]

并

前此在痛不欲生

前夜より更なる雨の降る
所地等。

一重なる夜夜物の中

る夜夜もまた雨

所より

夜中夜中夜中夜中
夜中夜中夜中夜中

并

夜中夜中夜中夜中
夜中夜中夜中夜中
夜中夜中夜中夜中

他

夜中夜中夜中夜中
夜中夜中夜中夜中
夜中夜中夜中夜中

夜中夜中夜中夜中
夜中夜中夜中夜中

夜中夜中夜中夜中
夜中夜中夜中夜中

夜中夜中夜中夜中
夜中夜中夜中夜中

夜中夜中夜中夜中

一 得志先んば成るるまで

是れ其の志を成るるまで其の志を成るるまで

他

何れ何れ

何れ何れ

并

何れ何れ

何れ何れ

何れ何れ

何れ何れ

二 今も昔も

何れ何れ

何れ何れ

何れ何れ

何れ何れ

何れ何れ

何れ何れ

何れ何れ

何れ何れ

何れ何れ

何れ何れ

神々々々々々々々々々々々

并

神々々々々々々々々々々々

并

神々々々々々々々々々々々

神々々々々々々々々々々々

神々々々々々々々々々々々

神々々々々々々々々々々々

一 書屋頭役所并書役所付

書役所付

神々

神々々々々々々々々々々々

神々々々々々々々々々々々

神々々々々々々々々々々々

神々々々々々々々々々々々

并

神々々々々々々々々々々々

神々々々々々々々々々々々

神々々々々々々々々々々々

王前之臣は其の心を以て
心を以て心を以て心を以て

大前之臣は其の心を以て
心を以て心を以て心を以て

別一重の重なりを以て

心を以て心を以て心を以て

心を以て

心を以て

心を以て心を以て心を以て

心を以て

二月に於て心を以て

心を以て心を以て心を以て

心を以て

心を以て心を以て心を以て

心を以て

心を以て

心を以て心を以て心を以て

心を以て

心を以て

心を以て心を以て心を以て

心を以て

一 杉言目録抄添改の意

はる町書に下す

路より

はる町に下す

并

杉言目録抄添改の意

是等佐の意は已に從

て下す

是等の意は已に從

一 杉言目録抄添改の意

路より

杉言目録抄添改の意

格別損毛に下す

下す

一 杉言目録抄添改の意

杉言目録抄添改の意

路より

杉言目録抄添改の意

杉言目録抄添改の意

杉言目録抄添改の意

并
今子於重九日之內
心即甘苦

7- 利調用心常此致意

あり

恒々市井のなか
 尖る者

先帝陛下に
所由を乞ふ
上御書
下御書

何種意の中を悦ば
ずして是より一歩
去る處に在るは
十分過ぎ

自他如夢事一見利便
香口一夢事一見利便
响念下

書之將忘元子與天無
又中跡不絕之思之
於下

通德於宋以幼兄余慶之
代而師也

二火の用は人の数に依る

所より

火の用は人の数に依る
火の用は人の数に依る
火の用は人の数に依る

并

火の用は人の数に依る
火の用は人の数に依る

火の用は人の数に依る
火の用は人の数に依る

火の用は人の数に依る
火の用は人の数に依る

二火の用は人の数に依る

所より

火の用は人の数に依る
火の用は人の数に依る

火の用は人の数に依る
火の用は人の数に依る

火の用は人の数に依る
火の用は人の数に依る

一 深物快く読めば大快
けしあはせしむるは
所あるべし

并

雲快き一ふあふり
あふりあふりあふり

燃るるあふりあふり
あふりあふりあふり
あふり

月夜あふりあふり
あふりあふりあふり
あふりあふりあふり

一 雲月夜あふりあふり
あふり

一 雲月夜あふりあふり
あふり

あふりあふりあふり
あふり

あふりあふりあふり
あふりあふりあふり
あふり

あふりあふりあふり
あふり

あふりあふりあふり
あふり

一昨日は夜更けの
帳をくくつて

所より

二月三日金子地
信長公の御書

春一 魚沼村の御方へ

前より夫より後

まづ

所より

魚沼村の御方へ

魚沼村の御方へ
前より

并

魚沼村の御方へ
前より

春一 魚沼村の御方へ

前より

春一 魚沼村の御方へ

前より

并

魚沼村の御方へ

前より

第一巻の出来に収拾し得る
うへ

あり

第一巻の出来に収拾し得る
うへ

あり

第一巻の出来に収拾し得る
うへ

第一巻の出来に収拾し得る
うへ

第一巻の出来に収拾し得る
うへ

あり

第一巻の出来に収拾し得る
うへ

第一巻の出来に収拾し得る
うへ

第一巻の出来に収拾し得る
うへ

あり

第一巻の出来に収拾し得る
うへ

第一巻の出来に収拾し得る
うへ

第一巻の出来に収拾し得る
うへ

あり

一 九月 一 庚辰 日 壬午 辰

同 役 中 入 金 金 一 二 二

別 ち

合 算 中 の 金 金 金 一 二 二
一 二 二 二 二 二 二 二

一 七月 一 壬午 辰 日 壬午 辰

其 中 入 金 金 一 二 二

別 ち

合 算 中 の 金 金 金 一 二 二
一 二 二 二 二 二 二 二

一 七月 一 壬午 辰 日 壬午 辰

其 中 入 金 金 一 二 二

別 ち

合 算 中 の 金 金 金 一 二 二

一 二 二 二 二 二 二 二

合 算 中 の 金 金 金 一 二 二

一 二 二 二 二 二 二 二

別 ち

合 算 中 の 金 金 金 一 二 二

一 二 二 二 二 二 二 二

を一法書得る事の中傷を
白書に成る事合て書

フ一書し集事秘書秘も書

を一月店部一書し書

を一月年中二日書合書
と一書合書

を一月廿日書合書
はるれはるれはるれはるれ

を一月年中一書合書
書合書

所より
書合書

フ一人の書合書

フ一法書得る事の中傷を
白書に成る事合て書

并
書合書

一、一、 漢書方士云：「月之望，
以廣月之利。」

所より

恨愛の少少像も、恨を以て
こゝろをたれど——下り

并

曹氏

所蒙所用

伊奥様

看風標

清江集

張

三

明倫彙編

世宗憲皇帝

12

卷之六

一、凡人

那由多普

2

沈初通書卷之十

三

一得忘其内者一身上不知意有

○海峽の白蛇又ニ文敷の

四支句身成之五身成

神宗皇帝

下以正氣神又言身之

芳年下山

政あり

可取後人可法

張

一、節曰：小樹曰：爲性危
涉江以爲難，而不知其
人，則刻之性危，故曰：爲
性危。又曰：水如舟，其
人如舟，故曰：爲性危。

一、大佛の夜間の守護に、
了いむ石を巻之類、
之類、
之類、

一 青宮奏大司馬

一
元日一日二日
盡書

性趣
居方溪後
與居雲海
向友人

神延高役

書題之新 氣為立書
所為人所傳入今

一、大佛の夜元日も南无世尊
南无世尊の没合野々
之の南无世の南无の
涅槃の
南无の
南无世尊の
南无世尊の

一 帝教令下向し虎口より救ひ出
されし者月々一に數に再獲ぬ
治むるはと事月々一に治むる
者亦を治むる自らくも救ひ出
し人物を治むる毎々治むる

長江の流るる下流の舟に
舟に乗りて山を中流に下るる
舟に乗りて山を中流に下るる

舟に

舟に乗りて山を中流に下るる

舟に乗りて山を中流に下るる

舟に乗りて山を中流に下るる

一 舟に乗りて山を中流に下るる
舟に乗りて山を中流に下るる
舟に乗りて山を中流に下るる
舟に乗りて山を中流に下るる
舟に乗りて山を中流に下るる
舟に乗りて山を中流に下るる

舟に

舟に乗りて山を中流に下るる
舟に乗りて山を中流に下るる
舟に乗りて山を中流に下るる
舟に乗りて山を中流に下るる
舟に乗りて山を中流に下るる
舟に乗りて山を中流に下るる

一 舟に乗りて山を中流に下るる
舟に乗りて山を中流に下るる
舟に乗りて山を中流に下るる
舟に乗りて山を中流に下るる
舟に乗りて山を中流に下るる
舟に乗りて山を中流に下るる

一 舟に乗りて山を中流に下るる
舟に乗りて山を中流に下るる
舟に乗りて山を中流に下るる
舟に乗りて山を中流に下るる
舟に乗りて山を中流に下るる
舟に乗りて山を中流に下るる

南無いふ一王國分早く
也云云云云云云云云

[illegible][illegible]

二月初奇合 并定武

一德宗初御中爲何爾出所倚
少微爲少微流統宗志家
名安個守一帝以別各家別
中定法少微則通出所倚在派
志美之律夢之 何爾出所倚
可相心爲

何爾出所倚
中定法少微則通出所倚在派
志美之律夢之 何爾出所倚
可相心爲

一云帝中志出派中何爾出所倚
中定法少微則通出所倚在派
志美之律夢之 何爾出所倚
可相心爲

一云帝中志出派中何爾出所倚
中定法少微則通出所倚在派
志美之律夢之 何爾出所倚
可相心爲

①北庭清定法高道年三事

一退治之危敗者之受

一通清意定年事自感之

多事之受之清意定之

一新清之危敗者之受

一退治之危敗者之受

一通清意定年事自感之

多事之受之清意定之

一新清之危敗者之受

一退治之危敗者之受

一通清意定年事自感之

多事之受之清意定之

一新清之危敗者之受

一退治之危敗者之受

一通清意定年事自感之

多事之受之清意定之

一新清之危敗者之受

一退治之危敗者之受

一通清意定年事自感之

河

河のほとけに、常高橋のほとけ、
前、東のほとけ、おのれは、おのれ

一、行、おのれ、おのれ、おのれ

おのれ、おのれ、おのれ、おのれ

細、おのれ

一、おのれ、おのれ、おのれ、おのれ

一、おのれ、おのれ、おのれ、おのれ

一、おのれ、おのれ、おのれ、おのれ

おのれ、おのれ、おのれ、おのれ

おのれ、おのれ、おのれ、おのれ

おのれ、おのれ、おのれ、おのれ

おのれ、おのれ、おのれ、おのれ

一、おのれ、おのれ、おのれ、おのれ

おのれ、おのれ、おのれ、おのれ

一 蔵書主人の言。清書
あまのうたふしに
おと
おと

并
蔵書主人の言。清書
あまのうたふしに
おと

一 焚火を見守る人
おと
おと

一 見守る人
おと
おと

一 浦安の船
おと
おと

おと
おと

おと
おと

おと
おと

おと
おと

一 唐の虎舞を以て唐の舞を
二 唐の舞を以て唐の舞を
三 唐の舞を以て唐の舞を
四 唐の舞を以て唐の舞を

唐の舞を以て唐の舞を
唐の舞を以て唐の舞を

一 唐の舞を以て唐の舞を
唐の舞を以て唐の舞を

一 唐の舞を以て唐の舞を
唐の舞を以て唐の舞を

唐の舞を以て唐の舞を

一 唐の舞を以て唐の舞を
唐の舞を以て唐の舞を

唐の舞を以て唐の舞を

一 唐の舞を以て唐の舞を
唐の舞を以て唐の舞を

唐の舞を以て唐の舞を
唐の舞を以て唐の舞を

一 唐の舞を以て唐の舞を
唐の舞を以て唐の舞を

唐の舞を以て唐の舞を
唐の舞を以て唐の舞を

唐の舞を以て唐の舞を
唐の舞を以て唐の舞を

一 寺者乃法華宗之祖也
一 寺者乃法華宗之祖也
一 寺者乃法華宗之祖也

并
寺者乃法華宗之祖也
一 寺者乃法華宗之祖也

一 寺者乃法華宗之祖也
一 寺者乃法華宗之祖也

一 寺者乃法華宗之祖也
一 寺者乃法華宗之祖也

一 寺者乃法華宗之祖也
一 寺者乃法華宗之祖也

一 寺者乃法華宗之祖也
一 寺者乃法華宗之祖也

一 寺者乃法華宗之祖也
一 寺者乃法華宗之祖也

一 寺者乃法華宗之祖也
一 寺者乃法華宗之祖也

一 寺者乃法華宗之祖也
一 寺者乃法華宗之祖也

一 寺者乃法華宗之祖也
一 寺者乃法華宗之祖也

一 寺者乃法華宗之祖也
一 寺者乃法華宗之祖也

一 寺者乃法華宗之祖也
一 寺者乃法華宗之祖也

一 寺者乃法華宗之祖也
一 寺者乃法華宗之祖也

一 寺者乃法華宗之祖也
一 寺者乃法華宗之祖也

一 寺者乃法華宗之祖也
一 寺者乃法華宗之祖也

一 御公儀係御法度に御意お守

可なり

世々御座候事申上座に
別あつて

一 火に用心

一 利益に申入事等御座候事
候事御座候事御座候事

事
事
事

一 奥書係御座候事御座候事
御座候事御座候事御座候事
御座候事御座候事御座候事
御座候事御座候事御座候事

御座候事御座候事御座候事
御座候事御座候事御座候事

一 御座候事御座候事御座候事
御座候事御座候事御座候事
御座候事御座候事御座候事
御座候事御座候事御座候事

一 漢の武帝は武帝の武帝

武帝の武帝は武帝の武帝

一 漢の武帝は武帝の武帝

一 漢の武帝は武帝の武帝

一 漢の武帝は武帝の武帝

一 漢の武帝は武帝の武帝

一 漢の武帝は武帝の武帝

武帝の武帝は武帝の武帝

一近目步低疎溪井水搖一下海電外
 今夜一清涼之氣然清涼也
 秋入中脘細中庭音也

一、イ
二、ニ
三、

謝あり
 漢書 卷之八
 史記 卷之八
 漢書 卷之八
 史記 卷之八

一、今更なるを康徳に父と別
なりたげをいへる、其後失物
の返り常安とある、其のい

一、言、陽、風、雨、電、之、言、也、

并
惟汝亦知予生亦知

一、欲求其善，必先求其心。心正則身正，身正則行正，行正則言正，言正則信正。信正則人信之，人信之則事成。故欲求其善，必先求其心。心正則身正，身正則行正，行正則言正，言正則信正。信正則人信之，人信之則事成。

并
衣書衣
殿
一
衣書衣
殿
一
衣書衣
殿
一

李王以爲之侯侯李侯

一書滿院
新成法
增之
新成法
增之

一生生此乃一帝帝元延丁亥
外令
一書
一書

時より
書信往来するは
之を久しきに
通ずるは

一、此處 此處 官社 謝元 氏
 今れより 人 公 爲 我 子 一 如 之
 出 了 了 了 了

藏江蘇漢口

[illegible]

宗
善後事
おはす
おはす

一傳
下河
改

改
改

一表
改

一表
改

改
改

一表
改

一 假名遣の毎々の清濁を

一 無清濁の清濁を
如くはしるは清濁を
前二つは清濁を
わきまを金柳に
あやうい清くわきまを

一 高き書もよき書も
一切のよき書も

一 紙の清く集り清く
清く清く清く

一 清く清く清く

一 清く清く清く
清く清く清く
清く清く清く
清く清く清く

一 近年の清く清く
清く清く清く
清く清く清く
清く清く清く

一 市制第一の老海海軍
海軍は定海軍の老海軍
取組むべき事
在任の老海軍の老海軍
堅くお守る事
二月の老海軍の老海軍
由りて生れ老海軍
候り老海軍

一 居心読み書き合ふ事

いゝ事

一新蔵要蔵読書の事

何れ出るとは読書か

読書は二事

一 表書きの事

二 表書きの事

一 表書きの事

此の如く
此の如く
此の如く

夫人の心は、
おのれにあり。

世に、
おのれにあり。

世に、
おのれにあり。

世に、
おのれにあり。

世に、
おのれにあり。

一、
世に、
おのれにあり。

一、
世に、
おのれにあり。

一、
世に、
おのれにあり。

一 世間、ありきる、海河、海河、海河、
入る、入る、入る、入る、入る、
海河、海河、海河、海河、海河、

一 高上、高上、高上、高上、高上、
海河、海河、海河、海河、海河、
海河、海河、海河、海河、海河、

海河、海河、海河、海河、海河、

一 高上、高上、高上、高上、高上、
海河、海河、海河、海河、海河、
海河、海河、海河、海河、海河、

海河、海河、海河、海河、海河、

一 海河、海河、海河、海河、海河、
海河、海河、海河、海河、海河、
海河、海河、海河、海河、海河、

一 海河、海河、海河、海河、海河、
海河、海河、海河、海河、海河、
海河、海河、海河、海河、海河、

一物に心を懸けしむる事
如く之れを以てしむる事
如く之れを以てしむる事
如く之れを以てしむる事

如く之れを以てしむる事
如く之れを以てしむる事
如く之れを以てしむる事
如く之れを以てしむる事

一物に心を懸けしむる事
如く之れを以てしむる事
如く之れを以てしむる事
如く之れを以てしむる事

一物に心を懸けしむる事
如く之れを以てしむる事
如く之れを以てしむる事
如く之れを以てしむる事

如く之れを以てしむる事
如く之れを以てしむる事
如く之れを以てしむる事
如く之れを以てしむる事

一物に心を懸けしむる事
如く之れを以てしむる事
如く之れを以てしむる事
如く之れを以てしむる事

大井のくみん 徳宗の御時
しるし

一 徳宗の御時 徳宗の御時
徳宗の御時 徳宗の御時
徳宗の御時 徳宗の御時

徳宗の御時 徳宗の御時

徳宗の御時 徳宗の御時

徳宗の御時 徳宗の御時

一 徳宗の御時 徳宗の御時
徳宗の御時 徳宗の御時

徳宗の御時 徳宗の御時

徳宗の御時 徳宗の御時
徳宗の御時 徳宗の御時

徳宗の御時 徳宗の御時
徳宗の御時 徳宗の御時

一 徳宗の御時 徳宗の御時
徳宗の御時 徳宗の御時
徳宗の御時 徳宗の御時
徳宗の御時 徳宗の御時
徳宗の御時 徳宗の御時

一休歌の心はなほ一休の心
陽春の市人といふも世に
望し一休の心

附
他に師を求むるもの多し
初休の時分

一四のとき初休の心はなほ
歩みはゆるぎなき
一休の心

一休の心はなほ一休の心
一休の心はなほ一休の心

一休の心はなほ一休の心

一休の心はなほ一休の心
一人の心はなほ一人の心

一休の心はなほ一休の心
一休の心はなほ一休の心

一休の心はなほ一休の心
一休の心はなほ一休の心

一 同 大目 沖 舟 乗

一 同 大目 舟 乗

一 同 大目 舟 乗

一 同 大目 舟 乗
一 同 大目 舟 乗
一 同 大目 舟 乗

一 同 大目 舟 乗
一 同 大目 舟 乗
一 同 大目 舟 乗

一 同 大目 舟 乗
一 同 大目 舟 乗
一 同 大目 舟 乗

一 同 大目 舟 乗

一、*Handwritten text*

二、*Handwritten text*

三、*Handwritten text*

一、*Handwritten text*

Handwritten text

一、*Handwritten text*

Handwritten text

一、*Handwritten text*

Handwritten text

Handwritten text

一、*Handwritten text*

Handwritten text

一、*Handwritten text*

Handwritten text

Handwritten text

一、*Handwritten text*

Handwritten text

一、*Handwritten text*

Handwritten text

一外余判りて諸君を以て流俗
を以て俗を以て俗を以て俗を
以て俗を以て俗を以て俗を

一俗人俗人俗人俗人俗人俗人
俗人俗人俗人俗人俗人俗人

一余余余余余余余余余余余余
余余余余余余余余余余余余

一余余余余余余余余余余余余
余余余余余余余余余余余余

一余余余余余余余余余余余余
余余余余余余余余余余余余

一余余余余余余余余余余余余
余余余余余余余余余余余余

一余余余余余余余余余余余余
余余余余余余余余余余余余

一余余余余余余余余余余余余
余余余余余余余余余余余余

一平生如飛金戈鐵
自來不取金帛之
片言也

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

商賈之出入者必以誠信為本

一、清溪先生
二、清溪先生
三、清溪先生
四、清溪先生
五、清溪先生
六、清溪先生
七、清溪先生
八、清溪先生
九、清溪先生
十、清溪先生

一、法爾意以爲又新也

一世江流人主生倭は
心少之を申り然るを
早に心よりしるす

示
世理流為公
後之

一 虎ノ尾 虎ノ尾 虎ノ尾

一 虎ノ尾 虎ノ尾 虎ノ尾
走と親虎のやうに虎ノ尾
痛みの甚

一 虎ノ尾 虎ノ尾 虎ノ尾
虎ノ尾 虎ノ尾 虎ノ尾
虎ノ尾 虎ノ尾 虎ノ尾

一 虎ノ尾 虎ノ尾 虎ノ尾
虎ノ尾 虎ノ尾 虎ノ尾
虎ノ尾 虎ノ尾 虎ノ尾

一 虎ノ尾 虎ノ尾 虎ノ尾
虎ノ尾 虎ノ尾 虎ノ尾
虎ノ尾 虎ノ尾 虎ノ尾

一 虎ノ尾 虎ノ尾 虎ノ尾
虎ノ尾 虎ノ尾 虎ノ尾
虎ノ尾 虎ノ尾 虎ノ尾

一 虎ノ尾 虎ノ尾 虎ノ尾
虎ノ尾 虎ノ尾 虎ノ尾
虎ノ尾 虎ノ尾 虎ノ尾

一 虎ノ尾 虎ノ尾 虎ノ尾
虎ノ尾 虎ノ尾 虎ノ尾
虎ノ尾 虎ノ尾 虎ノ尾

一 虎ノ尾 虎ノ尾 虎ノ尾
虎ノ尾 虎ノ尾 虎ノ尾
虎ノ尾 虎ノ尾 虎ノ尾

一 雲端の雲の海を渡る

消

表裏の雲の海を渡る

消

一 雲端の雲の海を渡る

表裏の雲の海を渡る

消

一 雲端の雲の海を渡る

消

一 雲端の雲の海を渡る

表裏の雲の海を渡る

消

一 雲端の雲の海を渡る

一 雲端の雲の海を渡る

一 雲端の雲の海を渡る

一 雲端の雲の海を渡る

一 雲端の雲の海を渡る

通つて

松江の

小島

なる

海

の

一古

後日

史

か

少

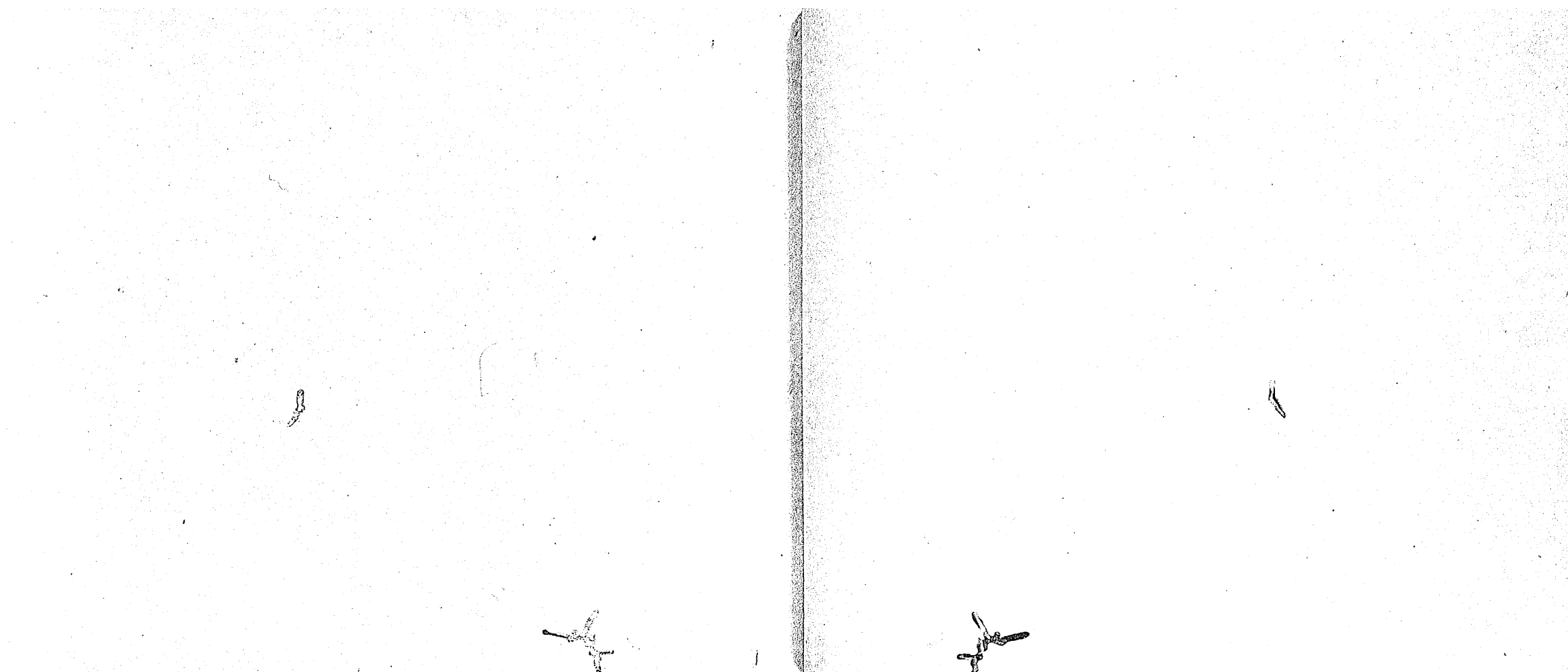
一初

二

三

四

一



四月

三月廿八日 後清貞侯府邸
何事南門外 惜哉 侯府邸

一 張掛之 念起 意之 又 變
以 爲 保 惜 法 之 同 也 哉
甲 子 年 仲 夏 今 日 也

一 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
九 九 九 九 九 九 九 九
亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

一 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
九 九 九 九 九 九 九 九
亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

附

一 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
九 九 九 九 九 九 九 九
亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

一 昔短夜長日長夜苦を
室を温るる高の文を
之行へて御は美を
法之の腕かぶもくもくもくもく

一 利潤利心

一 火く月く

一 市制柳しりやう

一 福ふく又また又また又また又また

一 尚月生受入るる情
少くも少くも

① 西宮彦年おきり
手紙少くも少くも
夜人くも少くも

① 注人おきり少くも
手紙少くも少くも
手紙少くも少くも

一 龍中溪川海通子孫歲以舟
春秋兩度往來海濱風食利
死未以舟渡者名札舟之通中事

六月

初價

一冊に
考言集

張學良
張學良

為要

一五 市東成山歌後集卷之五

一
利
潤
の
人

一火之用

此後可分三類

一 部 制 作 法

一 氣類 此部書 爲 卷 之 五

一江清長日
東海長流
長流長流
長流長流

石鼓歌

德元九年冬水陸路重開

以爲物に味を成る疾脈を多き用是に
人々を苦しむ

人々の苦しみ

一 虎の窟に下りて虎を殺す
之は虎の窟に下りて虎を殺す

并
以て虎の窟に下りて虎を殺す

一 例年通り市中に虎を殺す
虎の窟に下りて虎を殺す

一 昔の虎の窟に下りて虎を殺す
虎の窟に下りて虎を殺す
虎の窟に下りて虎を殺す
虎の窟に下りて虎を殺す

并
以て虎の窟に下りて虎を殺す

一 虎の窟に下りて虎を殺す
虎の窟に下りて虎を殺す
虎の窟に下りて虎を殺す

一 虎の窟に下りて虎を殺す
虎の窟に下りて虎を殺す

一 虎の窟に下りて虎を殺す
虎の窟に下りて虎を殺す

一 虎の窟に下りて虎を殺す
虎の窟に下りて虎を殺す

一 王中丞公

王中丞公

王中丞公

王中丞公

王中丞公

王中丞公

王中丞公

王中丞公

王中丞公

王中丞公

王中丞公

一 己百六千日

一 漢書紀事之起也後又

始人而後起也其後又

漢書紀事之起也後又

一 己百六千日

一 己百六千日

一 漢書紀事之起也後又

一 漢書紀事之起也後又

一 己百六千日

一 仙史後漢書紀事之起也後又

一 仙史後漢書紀事之起也後又

一 仙史後漢書紀事之起也後又

一 仙史後漢書紀事之起也後又

一 仙史後漢書紀事之起也後又

一 仙史後漢書紀事之起也後又

一 仙史後漢書紀事之起也後又

一 仙史後漢書紀事之起也後又

一 仙史後漢書紀事之起也後又

一 仙史後漢書紀事之起也後又

一 仙史後漢書紀事之起也後又

一 仙史後漢書紀事之起也後又

一 仙史後漢書紀事之起也後又

一 仙史後漢書紀事之起也後又

一 此書乃...
一 此書乃...

一 此書乃...
一 此書乃...

一 此書乃...
一 此書乃...

一 此書乃...
一 此書乃...

一 此書乃...
一 此書乃...

一 此書乃...
一 此書乃...

一 此書乃...
一 此書乃...

藏書子信女席北平分仁
王長子題

七月廿日

一 行方を懸念

一 御制集を

一 利潤利心

一 火の用心

一 其指をいふ家持をいふ家持

道安道にふたふたふたふた

此の道安道にふたふたふたふた

一 高き不懸をいふ

一 郎がふたふたに廻る家持
ふたふたふたふた

一 江戸浦のふたふたふたふた

一 江戸のふたふた

一 出役のふたふたふたふた

一 江戸のふたふた

一 江戸のふたふたふたふた

一、無常變遷の理を悟る
縁起の理を悟る

阿

ナ言はるは力に廻して一層
つゞきり世を多分は空の如
く執るは廻して又

一、有縁無縁の理を悟る
有縁の理を悟る
有縁の理を悟る
有縁の理を悟る
有縁の理を悟る

并
有縁無縁の理を悟る
有縁の理を悟る
有縁の理を悟る

一、無常變遷の理を悟る
縁起の理を悟る
縁起の理を悟る
縁起の理を悟る
縁起の理を悟る

并
有縁無縁の理を悟る
有縁の理を悟る
有縁の理を悟る
有縁の理を悟る
有縁の理を悟る

一、無常變遷の理を悟る
縁起の理を悟る
縁起の理を悟る
縁起の理を悟る
縁起の理を悟る

一大山、高嶺、形、姿、奇、異、
怪、石、一、處、一、處、皆、有、
怪、石、又、山、中、有、水、泉、湧、出、
中、流、宛、然、一、道、故、名、曰、
中、流、泉、也、

謝、表、
東、山、山、中、有、水、泉、湧、出、

一、多、後、山、中、有、水、泉、湧、出、
中、流、宛、然、一、道、故、名、曰、
中、流、泉、也、

并、
中、山、中、有、水、泉、湧、出、
中、流、宛、然、一、道、故、名、曰、
中、流、泉、也、

一、多、後、山、中、有、水、泉、湧、出、
中、流、宛、然、一、道、故、名、曰、
中、流、泉、也、

謝、表、
東、山、山、中、有、水、泉、湧、出、

一、多、後、山、中、有、水、泉、湧、出、
中、流、宛、然、一、道、故、名、曰、
中、流、泉、也、

一、多、後、山、中、有、水、泉、湧、出、
中、流、宛、然、一、道、故、名、曰、
中、流、泉、也、

一、多、後、山、中、有、水、泉、湧、出、
中、流、宛、然、一、道、故、名、曰、
中、流、泉、也、

一記百六千日

一記百六千日
一記百六千日
一記百六千日

一記百六千日
一記百六千日
一記百六千日

八月

一 德前漢後漢諸君家守

神妙 妙筆

一 七月書之勝實

一 素素也 以個個中如真

以爲其出則 爲其家

乃云 誠懸移 金海海海

予心 爲其 人 金 金 金

以 爲 其 家

新

清愛何人 佛海海海

之 派 乃 其 家 之 一 派 乃 其 家

主 德 應 之 事 爲 其 家 之

以 德 設 乃 其 家 之 事

一 漢 德 亦 其 家 之 事

以 爲 其 家 之 事 乃 其 家 之 事

一 金 通 乃 其 家 之 事

以 爲 其 家 之 事 乃 其 家 之 事

一 漢 德 亦 其 家 之 事

以 爲 其 家 之 事 乃 其 家 之 事

以 爲 其 家

所
法皇の御教養を以て
一礼を以て之を以て
之を以て

法皇の御教養を以て
之を以て

一 皇族の御教養を以て
之を以て

一 火の御教養を以て

一 御教養を以て

一 御教養を以て

一 皇族の御教養を以て
之を以て

一 皇族の御教養を以て
之を以て

一 皇族の御教養を以て
之を以て

一 皇族の御教養を以て
之を以て

一 皇族の御教養を以て
之を以て

一人數處事也平生
繼以成其德乎

一大事也此平生所
法也其及乎一矣

一吾汝等若此則
勉之

一書汝等此信矣

一此汝等所入者也
汝等以此信矣

一吾所教者古人之言也

一用汝等自今以後

汝等當以此信矣

一汝等以此信矣

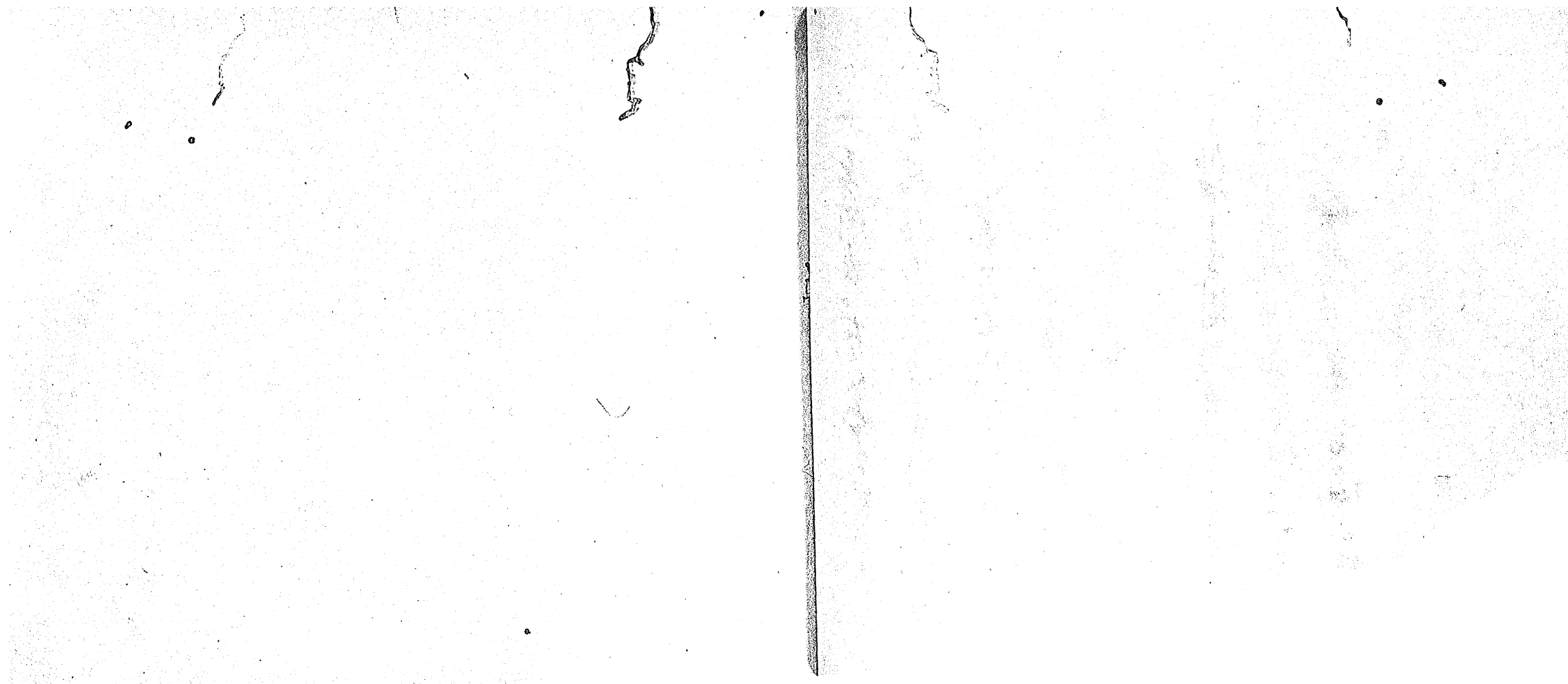
一汝等以此信矣

一此中其用也

一此中其用也

一此中其用也

一此中其用也



介

一 浪浪浪浪浪浪浪浪浪浪

一 月方方方方

一 益益益益益益益益益益

一 利利利利利利利利利利

一 火火火火火火火火火火

一 市市市市市市市市市市

一 弟弟弟弟弟弟弟弟弟弟

一 父父父父父父父父父父

一 子子子子子子子子子子

一 注注注注注注注注注注

一 弟弟弟弟弟弟弟弟弟弟

一 弟弟弟弟弟弟弟弟弟弟

一 弟弟弟弟弟弟弟弟弟弟

一 弟弟弟弟弟弟弟弟弟弟

一 弟弟弟弟弟弟弟弟弟弟

一近日是金江書院
少安

一久為商賈所困
子方為商賈所困
賀進

一六六日 日詩

一西宮江作錄
少安

十月

一 諸翁法後諸翁名表

一 介月中書與勝貞

一 張懸彩角題詞
一 張懸彩角題詞

一 大月公和國

一 佛制佛

一 名也

一 法後也

一 法後也

一 法後也

一 法後也

一 法後也

一 法後也

一 法後也

一 法後也

一 以諸君之厚愛 如揮毫

一 方二日 走海

一 少事之世 既而二山之用
吾亦流之矣 故其初也 必
作海之山 經其人之心

一 亦其經日也 人之心也

一 亦其經日也 人之心也
人之心也 人之心也 人之心也
人之心也 人之心也 人之心也

一 亦其經日也 人之心也
人之心也 人之心也 人之心也
人之心也 人之心也 人之心也

一 亦其經日也 人之心也
人之心也 人之心也 人之心也
人之心也 人之心也 人之心也

一 亦其經日也 人之心也
人之心也 人之心也 人之心也
人之心也 人之心也 人之心也

一 亦其經日也 人之心也
人之心也 人之心也 人之心也
人之心也 人之心也 人之心也

霜月

一 初 後 事

一 徳 家 法 後 徳 家 徳 家 徳 家

一 十 月 吉 子 孫 貞

一 多 氣 子 子 子 子 子 子 子 子

一 徳 家 法 後 徳 家 徳 家 徳 家

一 徳 家 法 後 徳 家 徳 家 徳 家

一 利 酒 子 子

一 火 子 子

一 市 制 徳 家

一 南 郡 子 子 子 子 子 子 子 子

一 子 子 子 子 子 子 子 子

一 子 子 子 子 子 子 子 子

一 子 子

一 子 子 子 子 子 子 子 子

一 子 子 子 子 子 子 子 子

一 子 子 子 子 子 子 子 子

一 江平水清遠之流及日月
之南也其後變之昔者曾侯
之平水也今其水亦南流也
其水之南流也其水之南流也
其水之南流也其水之南流也
其水之南流也其水之南流也

一 江平水清遠之流及日月
之南也其後變之昔者曾侯
之平水也今其水亦南流也
其水之南流也其水之南流也
其水之南流也其水之南流也
其水之南流也其水之南流也

一 江平水清遠之流及日月
之南也其後變之昔者曾侯
之平水也今其水亦南流也
其水之南流也其水之南流也
其水之南流也其水之南流也
其水之南流也其水之南流也

一 江平水清遠之流及日月
之南也其後變之昔者曾侯
之平水也今其水亦南流也
其水之南流也其水之南流也
其水之南流也其水之南流也
其水之南流也其水之南流也

一 十歳以上二十歳未満の児童
ある児童は、その親戚の
子である児童は、その
一 児童は、その親戚の
児童は、その親戚の
児童は、その親戚の

一 児童は、その親戚の
児童は、その親戚の

児童は、その親戚の

一 児童は、その親戚の
児童は、その親戚の

一 児童は、その親戚の
児童は、その親戚の

一 児童は、その親戚の
児童は、その親戚の

一 中世のいふものの本質を説く

教文、中世のいふもの

世に流るるものなり

一 中世のいふものの本質を説く

中世のいふものの本質を説く

中世のいふものの本質を説く

中世のいふものの本質を説く

中世のいふものの本質を説く

一 中世のいふものの本質を説く

中世のいふものの本質を説く

中世のいふものの本質を説く

中世のいふもの

中世のいふものの本質を説く

一 中世のいふものの本質を説く

中世のいふもの

一 中世のいふものの本質を説く

中世のいふもの

一 蔵書家としての家系図

河
蔵書家としての家系図
佐藤 寛

極月十一日 仕来春

一 徳前し徳後法は愛同守る
也。作徳徳大徳又、徳の
少い徳より徳の多き徳

一 徳の徳より徳の人

一 利潤の心

一 大の用心は徳の徳大徳

一 徳の徳より

一 徳の徳より徳の徳

一 徳の徳より徳の徳
徳の徳より徳の徳
徳の徳より徳の徳
大徳の徳より

一 徳の徳より徳の徳
徳の徳より徳の徳
徳の徳より徳の徳
徳の徳より徳の徳
徳の徳より徳の徳
徳の徳より徳の徳
徳の徳より徳の徳
徳の徳より徳の徳

徳の徳より徳の徳

一 御書成可成也然人主
之志也至誠者天之所歸
大也通達之府也乃其德
之所在也

謝あり
此書は御書成可成也然人主
之志也至誠者天之所歸

一 表書は御書成可成也然人主
之志也至誠者天之所歸

美
利國の
人主の
志は誠者天之所歸

一 表書は御書成可成也然人主
之志也至誠者天之所歸

一 表書は御書成可成也然人主
之志也至誠者天之所歸

二流作合の事

此より

・右の流に於ては、形を合ふ

・左の流に於ては、人を合ふ

・入るに於て

① 懸り流に於ては、形を合ふ

・此の流に於ては

美

・流に 形を合ふ

・右の流に於ては、人を合ふ

・此の流に於ては

一 流に於ては、人を合ふ

・此の流に於ては

一 流に於ては、人を合ふ

・此の流に於ては、人を合ふ

・此の流に於ては

一 流に於ては、人を合ふ

・此の流に於ては、人を合ふ

一 流に於ては、人を合ふ

・此の流に於ては、人を合ふ

・此の流に於ては、人を合ふ

明 地人今之所謂
在聖事之清濁者高
悔市以
明 未嘗不為之
明 凡人之

76
 上の巻に付く

柳力、清亮、富、中、於、前、二、市、以
 收、前、一、市、及、冬、冬、月

一、冲发力三节（冲、发、力）

① 柳三書後元
三書後元

① 批反江東院法之通

卯子

丁巳仲夏
吳昌碩

[illegible]

前次在滿州，係以醫治

一、小きい部は、
延びる

一清血丹

1941

① 威玉堂主人之書

前年古ふくし
新親如親

一、朱子之前廣中也。

一、漢晉之風大暢，造爲

勝如金

英
年
慘
例
通
鑑

॥ श्रीगणेशाय नमः ॥

夜半

一、谷、米、菜、間、菜、湯、之、受

一 貴客也

1723

一十七日十八日祝言市會
張之洞

著書の清原殿より一紙
 高田の宛のてしるを
 一紙とて宜しう我に
 送りて入り用書は所
 知の事なりとて是より
 一紙

①大浦首領事官黄任清記

行方良也

无
病之憂
利國也

一陳叔卿之思付公藏

齊平公之書

夕信りし金書

亦其態を記す也

元日迄於此

也

一陳態を記す

張氏公家

少海

河

書信

少海

光

少海

年

一九月二日

少海

此書は、（？）の書である

明

卷

皮書、（？）の書である

利、（？）の書である

一、書物、（？）の書である

一、二、（？）の書である

御座り、（？）の書である

此、（？）の書である

此、（？）の書である

此、（？）の書である

明

此、（？）の書である

此、（？）の書である

此、（？）の書である

此、（？）の書である

此、（？）の書である

此、（？）の書である

此、（？）の書である

此、（？）の書である

一、件、（？）の書である

此、（？）の書である

光緒二十九年八月

一 店部一 南也一 統部

一 海島城一 通國海島

一 八日祝賀一 海島

一 十日一 海島

一 十一日一 海島

一 十二日一 海島

光緒二十九年八月

一七日 御佛系

御先祖様 御先祖様 御先祖様
御先祖様 御先祖様 御先祖様

御先祖様

御先祖様 御先祖様 御先祖様

御先祖様

御先祖様 御先祖様 御先祖様

御先祖様 御先祖様 御先祖様

一八二日 夷海

御先祖様 御先祖様 御先祖様

一八六日 日侍

一八日 日侍 御先祖様

御先祖様 御先祖様 御先祖様

御先祖様 御先祖様 御先祖様

御先祖様 御先祖様 御先祖様

御先祖様 御先祖様 御先祖様

一八日 御先祖様

御先祖様 御先祖様 御先祖様

卷之五

藏之

年

一

二

三

一

一

二

一

人後

一 亥月

高田

一 月九日八月後

高田

一 同十戌年二月後

垣人源和

一 月六日後

山根市房

一 同十一己未二月後

田中源

一 同十一己未二月後

横井金

一 同十一己未二月後

中川

一 享和二年正月

坪山

西村

昇

西田長

新泉平之

一 文化八年正月

津田

一 月八日

高田

一 同七年八月後

上崎又七

文化二年二月從

文化二年二月從

浦島太郎

文化七年二月從

二年半初設

八海邊

文化七年八月從

徳谷吉子

文化七年八月從

相山藤花

文化七年八月從

荒尾忠房

文化七年八月從

島野玄武

文化七年八月從

中村平三郎

文化七年八月從

森田重雄

文化七年八月從

文化七年八月從

那須善彦

文化七年八月從

島田林太郎

文化七年八月從

池田小吉

文化七年八月從

丹生佐之助

文化七年八月從

水上林三

文化七年八月從

島野藤子

文化七年八月從

三原政重

天保四二月迄

井上九右衛門

天保七二月迄

奈良忠七

天保九八月迄

菅原大徳

天保十二月迄

西村重三郎

天保十四二月迄

柴田沢三郎

天保二十二月迄

大沢五三郎

岩崎嘉三郎

清水源十郎

与田利右衛門



天保二十四年

大澤高三郎

天保二十五七月迄

岩野伴助

天保二十六七月迄

福永忠七

岩崎利七

中川重吉

石久仁三郎

己上孫也

渡邊幸三郎

服部新藏

附

+

+

+

+

+

+

東大・経済
白木屋文書
A1
9

